



平成30年度
(2018年度)

業 務 年 報

Annual Report for the year 2018

(令和元年11月)

地方独立行政法人 青森県産業技術センター野菜研究所

Local Independent Administrative Institution

Aomori Prefectural Industrial Technology Research Center

Institute of Vegetable Research

平成30年度 業務年報 目次

	頁
I 試験研究	
1 試験研究概要	1
2 主要な野菜・畑作物の生育状況	8
3 気象表・図	10
II 試験研究成果・普及情報の公表及び研修・技術協力	
1 試験研究成果・普及情報	
(1) 普及技術情報	13
(2) 刊行物	13
(3) 学会・研究会等報告	13
(4) 試験研究成果発表会	14
(5) 公開デー	14
(6) 一般雑誌・ラジオ・新聞・ホームページ	15
(7) 表彰	15
2 研修・技術協力	
(1) 農業ドクター	16
(2) 講師派遣	16
(3) 審査員派遣	18
(4) 会議・研究会	18
(5) 視察受け入れ	22
(6) 研修受け入れ	22
III 職員研修	
1 国内研修	23
2 県・産技研修	23
IV 種苗の生産と配布	
1 作物の原原種の採種	24
2 作物の原種の採種	24
3 種苗等の配布	24
V 資格取得	24
VI 総務	
1 位置・土地・建物	25
2 所掌事務・分掌事務	25
3 組織・職員	25
4 事務分担	26
5 予算	31
VII 圃場利用図	33

I 試験研究

1 試験研究概要

(1) 栽培部

ア 青森ブランド野菜の高品質安定生産技術の開発 (平成26年～30年)

(ア) ナガイモの高品質安定生産技術の開発

a ナガイモ品質低下要因の解明(平いも)

平いもは8月下旬以降に発生し始め、基肥量に対し追肥量が少ないと平いもの発生率が増加した。また、いも重が重くなると平いもの発生率が増加した。

b 種いもの大きさに応じた栽培体系(1年子種子)

(a) 収量性の評価

40gの1年子を用いて、頂芽を切除し5月下旬に植付けすると、慣行に比べていも長は短く、いも径が同等で、全重は軽く、総収量が3,612kg/10a(慣行比84%)であった。

(b) 芽付き種子の栽培体系

① 植え付け時期の検討

芽付き1年子を植付けた場合、35～45gの種いもは50～70gの種いものに比べ、5月1日植付けではやや低収(対照比94)、5月15日植付けと5月25日植付けでは低収(同85、89)であった。

② 1年子種子の離乳状況

頂芽付き40gの1年子を5月上旬に植え付けた場合の離乳時期は、植付け後65日前後となり、その時期のつる長は約190cm前後で新しいも長は6cm前後と推測された。頂芽付き40gの1年子を5月中旬に植えつけた場合の離乳時期は、植付け後52～55日となり、その時期のつる長は約180cm前後で新しいも長は6～7cm前後と推測された。

(イ) 夏秋どりイチゴの高品質安定生産技術

a 四季成り性品種「すずあかね」春定植作型における作業分散技術

対照区に大きな収穫ピークが見られなかったが、花房摘除処理により栽培前半の収穫ピークを抑制してその後の収量を増加できることを明らかにした。5月定植、育苗ポット径の違いによる収量差はなく、定植時期の分散が可能であると考えられた。

イ あおもりながいも産地改革推進事業(平成29年～30年)

(ア) 栽培技術アンケートの解析

今回アンケートを行った篤農家30名について解析したところ、高収量の農家が行っている栽培技術として、圃場前歴や地力を重視して圃場を選ぶ、堆肥の秋施用、110cmの畝幅、芽付き年子を使用する、芽欠きは植付けの11～20日前に行うことが抽出された。

AB品率が高い農家が行っている栽培技術として、明渠や心土破碎等の排水対策、堆肥の秋施用、25kg/10a以上の施肥量(芽付き)、3～4回の追肥回数(芽付き)、自家増殖年数を少なくする、種いも圃場の防除回数6回以上が抽出された。

(イ) ナガイモの生産性向上へ向けた高品質多収技術

a 植付け前の種苗管理技術

(a) 頂芽切除方法の検討

1年子の頂芽を早い時期に切除することで萌芽が早まった。収量への影響は、頂芽切除では早いと収量が多かったが、ガンク切除ではみられなかった。また、萌芽期と収量に相関はみられなかった。

(b) 種いもの種類と切りもにおける催芽処理の影響

切りもは催芽処理を行うことで、萌芽期が30日早まった。種いも重が同じ場合、切りもを植え付けると、収量は1年子に対し催芽ありで86%、催芽なしで67%となった。1年子と2年子は、生育や収量に違いがなかった。

b ナガイモの生産性向上へ向けた高品質多収技術

(a) 植付け時期の検討

普通栽培区に対し、60gの芽付き1年子の5月1日植付けでは総収量が96%、5月15日植付けでは93%、5月25日植付けでは92%となった。

(b) 冷蔵庫出庫時期の検討

1年子を冷蔵庫から出庫する時期を植付け7日前と植付け1日前で比較すると、萌芽揃いは植付け7日前に出庫することで6日早まったが、収量や品質への影響は見られなかった。

ウ 新たな土壌管理による高品質農産物生産技術に関する研究（平成30年）

(ア) ニンニクのりん酸減肥基準の検討

a 黒ボク土のりん酸減肥基準

可給態りん酸が50～150mg程度の黒ボク土圃場においてりん酸施肥量を減らすと、総収量は少なくなる傾向であったが、BC品が少なくなるためA品収量は慣行施肥と同等を確保できた。りん酸施肥量を減らしても、りん酸吸収量が慣行施肥を下回らなかったのは、中りん酸の圃場では半量施肥、高りん酸の圃場では半量施肥および無りん酸であった。

エ ニンニクイモグサレセンチュウ撲滅対策（平成30年～31年）

(ア) 収穫適期の予測

a 品種間差

りん片分化期から収穫期までの積算温度は「白玉王」が860℃・日、「福地ホワイト黒石A系統」（以下、黒石A）が958℃・日であった。

b マルチの種類

「黒石A」において、りん片分化期から収穫期までの積算温度は透明マルチが958℃・日、緑マルチが1022℃・日、黒マルチが1107℃・日であった。

c 種子りん片重

「黒石A」において、りん片分化期から収穫期までの積算気温は小種子が969℃・日、中種子が958℃・日、大種子が1078℃・日であった。

(イ) 収穫時期の判定と効率的乾燥試験

a 大型コンテナの活用による効率的な乾燥

茎長区よりも通常の対照区の方が乾燥日数が少なかった。原因としては茎長区では乾燥に伴い空隙が多くなったためと考えられた。現地乾燥においても同様に乾燥程度に差が見られた。

オ 水田を活用した野菜産地拡大事業（平成30年～31年）

(ア) 大型コンテナを活用したタマネギ省力

乾燥技術

a 機械化体系の検討

機械移植は植え傷みが多かったため、根鉢の形成を促進させ植え傷みを抑える育苗技術が必要と考えられた。移植時に苗取りおよび補植にかかる時間を少なくするため、全自動による移植機の導入及び欠株の少ない育苗技術が必要と考えられた。

b ニンニク乾燥施設を利用した大型コンテナ乾燥方法

スチコン区では乾燥初期に連続乾燥すると排気側の温度が徐々に上昇し、順調に乾燥が進んだと考えられた。根の乾燥程度はスチコン区の方が早い傾向があった。スチコン区の腐敗率はほぼ対照区並みであった。

カ 農作物の生育状況等に関する調査（平成26年～30年）

(ア) 野菜の作況試験

a ナガイモ

総収量は4,629kg/10a（平年比111）でA品収量1,400kg/10a（平年比94）であった。平いものの発生率は42.4%で次いでリング、曲がり、コブの発生が多かった。

b ニンニク

(a) 気象及び生育経過

本年は、萌芽が早く、根雪期間が短かく、3月の気温が高かったため葉数の進展は早かったが、地上部生育は平年並みであった。りん片分化期は平年より3日早く、その後断続的に降水があり、気温が平年並みで推移したことにより地下部の肥大は早くから進み、球肥大は平年を上回った。

(b) 収量・品質

本年はりん片分化期が早く、越冬後の気温が平年並みで断続的に降水があったため、肥大が早くから進み、葉の枯れ上がりも遅かったため、総収量は平年をやや上回った（平年比104）。裂球、奇形の発生が少なく、上物収量は平年を上回った（平年比112）。

c 小麦

本年は、穂数が平年比91と少なく、千粒重は102で並、一穂粒数が109で多く、子実重は59.5kg/a（平年比97）とやや低収であった。穂数が少なかった要因は、越冬前の気温が低かったことで分げつが少なくなり、穂数が少なかったためと考えられた。一穂粒数は補償作

用により多かったと考えられた。

d 大豆

本年は成熟期が平年より5日早かった。稈実莢数は少なく、莢内粒数が多く、粗百粒重は重く、粗子実重が平年比99となった。

キ パイプハウスで高収益を実現するICT利用型養液土耕制御システムの汎用化とその実証（平成29年～31年）

(ア) 現地地試験

a 夏秋トマト

生産者圃場において、トマトの樹勢管理を難しくしている要因が地下からの水分供給量が多太であること、前作のニンニクの残肥が多量にあることの2点であることを明らかにした。

b ハウスニンニク

ハウスニンニクの養液土耕栽培を実施した結果、りん片分化期である3月の施肥不足が要因となり収穫量は対照区と比べて減収した。

(イ) 所内試験

a 高度不耕起輪作に適する冬作業菜類の作型開発

(a) ホウレンソウ

播種日をずらして移植ホウレンソウ栽培を実施し、定植後収穫可能となる日数を明らかにし、作型図を作成した。また、苗の貯蔵期間・育苗管理温度が収量に及ぼす影響について検討した結果、今回の試験条件では播種後最大60日程度まで貯蔵可能であった。

(b) リーフレタス

播種日をずらして移植リーフレタス栽培を実施し、定植後収穫可能となる日数を明らかにし、作型図を作成した。

（２）品種開発部

ア 特産野菜優良品種の育成（平成26年～30年）

(ア) ナガイモ優良品種の開発

a 育種素材の養成

放射線照射したナガイモ8系統を供試し、2系統を有望、1系統を再検討と判定した。

b 遺伝資源の収集・保存

ナガイモを含むヤマイモ43系統を継代栽培し、遺伝資源として保存した。「アルプス」、「90KIA」、「90KIB」、「90KIC」のウイルス罹病株とウイルスフリー株を比較したところ、葉の病徴は罹病株でも軽かったが、収穫された子いもはフリー株が重かった。

c 育種系統（園試系23号）の栽培特性

(a) 所内試験

「園試系23号」は、早植栽培でも「園試系6」より肥大性がよいが平いもの発生率が高いこと、緩効性肥料を用いても平いもの発生率に大きな変化がないことが確認された。また、茎葉重と平いもや下部長方形（程度の軽い平いも、JA全農あおりの平成27年11月出荷基準により）の発生率との間の関連性が小さいことが示唆された。

(b) 現地試験

東北町の現地試験において、「園試系23号」は、「園試系6」に比べ、全長といも長が長く、いも重が重かった。総収量、AB品収量ともにもやや多かった。また、株間を広げるといも重は重くなり、3L以上のAB品収量は株間24cmで高くなった。

d ヤマノイモ交配育種素材の養成

「つくなが1号」と「園試系6」の交配8系統について特性を把握し、うち5系統を継続、3系統を打ちりと判定した。

(イ) ニンニク優良品種の開発

a 育種素材の養成

γ線照射株由来の9系統について、130～257個のりん球が得られた。そのうち7系統について露地栽培したが、品質のばらつきが大きく、生産力の検定は不可能であった。

b 系統選抜による品種育成

(a) 種球の選抜

選抜を進めてきた2系統について、これまで維持してきた各35の子系統から5系統を選抜し形質の安定化を図ったところ、A品率に向上傾向が認められた。

(b) 品種特性・収量性調査

「黒石A系統」の中から選抜した有望系統を栽培試験に供試した結果、総収量は同等であったが、球割れの発生が少なかったため、A品収量は増加した。

c 遺伝資源の収集・保存

ニンニクの遺伝資源として、保存している28系統を維持し、新たに1系統を収集した。

d ニンニクの障害発生要因の解明

無マルチ・追肥、多堆肥とするほど収量が増加する傾向が認められたが、球割れ発生率も高くなり、

A品収量は減少する傾向が認められた。

(ウ) イチゴ優良品種の開発

a 供試系統の形質調査・選抜（四季成り）

四季成り4系統について収量・品質等を比較した結果、「TK15（11sC-f1e）」を再検討とし、他の系統を打ち切りとした。

b 供試系統の形質調査・選抜（一季成り）

一季成り2系統について収量・品質等を比較した結果、いずれも打ち切りと判定した。

c 新配布系統の採苗

来年度収量試験用に新たに四季成り系統「TK29」「TK30」「TK31」「TK32」の苗をそれぞれ20株以上作成した。

d 現地試験

「すずあかね」と比較して特に優れるものではなく、評価は低かった。

イ 特産野菜原原種維持増殖事業（平成26年～30年）

本県の特産野菜原原種として、ナガイモは直径9mm以上のむかご、ニンニクはM規格以上のりん球を生産し、次年度の種子分などを除き、それぞれ280kg、450kgを、J A全農あおもりに供給した。

ウ 畑作物優良品種の選定（平成26年～30年）

(ア) 畑作物等原原種の維持・増殖

a 畑作物等（ナタネ、ソバ）の原原種の維持及び増殖

畑作物の原原種の保管を行った。

b 小豆及びエダマメ用大豆等の原原種等の維持

エダマメの原原種及び小豆、粟の保存系統の保管を行った。

エ 畑作物原種の生産・供給（平成26年～30年）

主要農作物の原種子を増殖した。ソバの生産数量は、予定数量とほぼ同等であった。

オ 水田を利用した野菜産地拡大事業（平成30年～31年）

(ア) 直播栽培によるタマネギ省力技術

a 移植栽培との比較

直播栽培は、移植栽培に比べ、収量が著しく劣った。

b 播種時期の検討

直播栽培の播種時期は、4月下旬が最も収量が多かった。なお、4月上・中旬については、発芽が悪くま

た倒伏しない株が多く見られた。5月上旬については、1個当たりの重量が少なく規格外が多かった。

c カルチベータの利用による雑草防除

カルチベータの使用について、タマネギの生育初期においては、誤って抜き取られた株の割合も低いことが確認できた。除草効果があることも確認できたが、今回の使用方法では、実際の栽培に利用できるほどの効果は無いと見られる。

カ あおもりながいも産地改革推進事業（平成29年～30年）

(ア) 優良種苗の安定生産技術

a 補光によるむかご増収効果

(a) 反射シートによる補光（簡易網室）

通路にネオポリシャインの1年目のものを張ることで、受光条件が改善されたほか、土壌水分を高く維持できたことから、むかごの総収量及び大型規格収量が増加した。

(b) 蛍光灯による補光（パイプハウス）

蛍光区では、むかごの総収量及び大型規格収量は少なくなったが、LED区では、むかごの総収量及び大型規格収量は多くなった。

b 催芽によるむかご増収効果（網室）

催芽によりむかごの増収効果がみられた。催芽処理による生育促進によりむかご数が増加することが増収につながったものと推察された。

c マルチによるむかご増収効果（網室）

緑マルチ及び黒マルチの有無によるむかご収量への大きな影響はみられなかった。

キ 青森県外・国外系統のニンニクを原料とした黒ニンニク製造研究（平成30年）

(ア) 原料ニンニクの育成

青森県外・国外系統のニンニク7系統のりん球を養成した結果、いずれも「黒石A」より球重が軽く、りん片数のばらつきが大きかった。

ク 冬春播き栽培におけるタマネギの生産安定化技術の開発と経済性（平成26年～30年）

(ア) 冬春播き栽培安定化技術の開発

a 品種特性の把握

腐敗率が低く、商品収量が高く、本県で一般的に種子が購入できる品種を選定したところ、7月中下旬倒伏期の「オーロラ」、7月下旬倒伏期の「もみじ3号」と「ケルたま」、7月下～8月上旬倒伏期の「マル

ソー」を選定した。

b 播種時期の検討

播種が2月中～下旬の間で育苗期間が約60日間である場合は、収穫量はほぼ同等であった。

c 育苗トレイの検討

調製重及び収量・商品収量は、200穴区に比べ、448穴区の方が小さくなった。しかし、その差は年次による違いが大きかった。

d 育苗温度の検討

収穫物の調製重及び収量・商品収量については、加温区と無加温区はほぼ同等であった。

e 施肥量の検討

施肥量による収量や腐敗について、2か年のデータが一致せず判然としなかった。

f 栽植密度の検討

栽植密度の違いにより倒伏期の違いは見られなかった。栽植密度が高くなることにより収量及び商品収量は増えるが小玉になる傾向が見られた。

g マルチの効果

無マルチ栽培の方がマルチ栽培に比べ、倒伏期が遅く調製重と収量は少なかったが、商品収量が多く、腐敗率及び分球率が低かった。

h 生育推移

草丈は、7月11日に最大となり徐々に減少。生葉数は、7/2に最大となり8月21日に全葉が枯死した。

茎葉重は、8月9日に最大となったが、球径及び球茎重は8月21日に最大となった。

(イ) 冬春播き栽培の経済性試算

経費については機械や施設をレンタルすることで購入価格の高い専用作業機の経費を下げることで可能と考えられる。また、専用作業機を使うことで大幅な労働時間の削減が可能と考えられる。

(3) 病 虫 部

ア 気象変動や生物多様性に適応した特産野菜の安全・安心な病害虫管理技術の研究開発（平成26年～30年）

(ア) 特産野菜に発生する病害虫の高感度診断技術の開発と気象変動に適応した発生生態の解明

a 病害虫の発生生態と防除技術

(a) ナス根腐症状の原因究明

ナス根腐症状の原因は、*Phytophthora glovera*によるナス根腐疫病であることが明

らかとなった。

(b) ニンニクのチューリップサビダニの発生生態と防除

① チューリップサビダニの圃場における発生推移

チューリップサビダニは、5月上旬までは葉身の葉脈沿いに寄生し、以降、ニンニクの生育に伴い葉身だけでなく葉身基部、葉鞘内部へと移動していくことを確認した。

(イ) 土壌微生物相診断に基づいたニンニク土壌病害虫の総合防除技術

a 土壌微生物相診断に基づいたニンニク土壌病害虫の総合防除技術の開発

イモグサレセンチュウによるニンニクの被害は、輪作①区（H27ダイコン・エン麦－H28ゴボウ－H29ニンジン－H30ニンニク）では試験開始前とほぼ同等、輪作②区（H27ダイコン・エン麦－H28ネギ－H29ゴボウ－H30ニンニク）、輪作③区（H27休閑－H28ツクネイモ－H29エダマメ－H30ニンニク）では低く抑えていた。

b イモグサレセンチュウの発生消長

無消毒区の土壌線虫密度は、5月中旬から収穫終了後の8月上旬にかけてやや増加傾向が見られた。消毒区では、ニンニク収穫後の7月上旬から徐々に増加し、8月に土壌消毒しなかったため、8月以降も増加していた。

イ ニンニクイモグサレセンチュウ撲滅対策（平成30年～31年）

(イ) 炭酸ガスを活用した種子消毒技術

a チューリップサビダニに対する炭酸ガスくん蒸の防除効果

ニンニクのチューリップサビダニに対する高濃度炭酸ガスくん蒸処理の防除効果は、処理温度が高くなるほど高くなった。

(イ) 収穫時期の判定技術と効率的乾燥技術

a イモグサレセンチュウ侵入把握による被害軽減のための収穫時期の判定

(a) 所内試験

「内側から3枚目の葉鞘基部への侵入」を判断基準とすると、「貯蔵中に被害りん球が発生し始める収穫時期」の判断が可能であり、本線虫による被害低減を目的とした収穫時期の判断基準として有効であると考えられた。

(b) 現地試験

内側から3枚目の葉鞘基部に本線虫の侵入を確認した時点での収穫は、生産者が実際に収穫した時点よりサイズは小さくなるが被害りん球率を低く抑えることができた。

ウ 農薬安全・国内検疫推進事業（平成30年～31年）

(ア) ニンニクのチューリップサビダニに対するトクチオン乳剤の種球浸漬の防除効果及び倍量薬害試験

トクチオン乳剤の1,000倍液120分種球浸漬は、収穫後のニンニクのチューリップサビダニの寄生を抑制する効果があり実用性があった。

エ あおもりながいも産地改革推進事業（平成29年～30年）

(ア) マルチローター（ドローン）を活用した薬剤散布の検討

a ナガイモにおけるマルチローターの散布特性の把握

マルチローターでナガイモ茎葉に対しうねと平行に散布をした場合、飛行高度は支柱先端から1～2m、散布幅はマルチローター直下から風下側に2.4m程度の範囲で薬剤の付着がよいと考えられた。

オ 農薬抵抗性病害虫・難防除雑草等の防除対策の高度化事業（平成30年）

(ア) マルチローターを活用した病害虫防除法の確立

a ナガイモの主要病害虫に対する防除効果
アドマイヤー顆粒水和剤160倍液のマルチローターによる3.2L/10a散布は、ナガイモのワタアブラムシに対し防除効果はやや低い実用性があると考えられた。アミスター20フロアブル24倍液、32倍液及び40倍液のマルチローターによる3.2L/10a散布は、ナガイモの葉渋病に対し防除効果があり実用性があると考えられた。

カ 農薬低減技術確立事業（平成28年～30年）

(ア) 生物くん蒸作物を利用した土壌病害虫

防除技術の開発

ナガイモ植付前年のチャガラシ処理は、ナガイモの根腐病被害を軽減する可能性が示唆されたが、その効果はクロピク処理に比べ大きく劣った。

(イ) 土壌消毒薬剤及びガス難透過性資材の防除効果

ソイリーンハイバリアー区を除き、クロピク使用量を削減した区はクロピク30L/10a処理区に比べ処理時のガス濃度の低下が早く、ナガイモ根腐病に対する防除効果が劣った。ソイリーン処理区は、低収傾向であった。

キ 冬春播き栽培におけるタマネギの生産安定化技術の開発と経済性（平成26年～30年）

(ア) 冬春播き栽培安定化技術の開発

無防除圃場におけるべと病と白斑葉枯病の発生は6月中旬、葉枯病の発生は7月上旬に認められ、その後収穫期にかけて増加した。5月中旬から計8回16剤の散布で、病害の被害を抑えられると考えられた。

(イ) 害虫の発生実態と防除

主要な害虫種はネギアザミウマで、発生初期から収穫時までの定期的な薬剤散布が必要と考えられた。ネギコガ、ネギハモグリバエはネギアザミウマ対象の防除をすることで被害は抑えられると考えられた。

ク フォース粒剤の生育期散布を活用した夏ダイコンにおける新たな防除体系の検討（平成30年）

ダイコンのキスジノミハムシ防除において、播種時の粒剤に加え、粒剤の生育期株元散布と茎葉散布剤を組み合わせることにより、は種時の粒剤と茎葉散布剤のみの慣行防除体系より防除効果がまさり、薬剤総使用回数を8回から7回に減らすことが可能であった。

ケ 病害虫防除農薬開発（平成21年～）

(ア) 主要病害に対する新農薬の防除効果

・ヤマノイモ（供試：ナガイモ「園試系6」）の根腐病に対する新農薬の防除効果を検討した。モンガリット粒剤18kg/10a作条土壌混和处理は、対照のクロピク80より効果がやや劣る

が、無処理に対して効果が認められた。実用性はある。24kg/10a作条土壌混和处理は、対照のクロピク80より効果が劣り、無処理に対しては効果が認められるがその程度は低かった。効果はやや低いが実用性はある。ユニフォーム粒剤18kg/10a、36kg/10a作条土壌混和は、対照のクロピク80とほぼ同等の効果があり、無処理に対して高い効果が認められた。実用性は高い。0YKファーマーリングエース100kg/10a作条土壌混和は、対照のクロピク80より効果が劣り、無処理に対して効果は認められず、実用性はない。いずれも薬害は認められなかった。

- ・ヤマノイモ（供試：ナガイモ「園試系6」）の根腐病に対する新農薬の防除効果を検討した。供試したカナメフロアブル200倍種いも瞬間浸漬処理は、対照のベンレートT水和剤20の20倍約2秒間種いも浸漬より効果が劣り、無処理に対して効果が低かった。実用性はないと考えられた。薬害は認められなかった。
- ・ヤマノイモ青カビ病に対する新農薬の防除効果を検討した（供試：ナガイモ「園試系6」）。ホームイ水和剤200倍10分間種いも浸漬は、ヤマノイモ青かび病に対して実用性がある。
- ・ネギ葉枯れ病に対する新農薬の防除効果を検討した。NC-241フロアブル（2,000倍）は、ネギ葉枯病に対して効果はやや低いが実用性がある。
- ・ゴボウの黒あざ病に対する新農薬の防除効果を検討した。無処理区で黒あざ病が発生せず、防除効果の判定はできなかった。薬害は認められなかった。
- ・ニンニクの黒腐菌核病に対する新農薬の防除効果を検討した（供試：福地ホワイ「黒石A系統」）。アフエットフロアブルの種球重量1%原液塗抹は、対照のベンレートT水和剤20の種球重量1%湿粉衣とほぼ同等の効果で、無処理に対して効果は認められるがその程度はやや低かった。効果はやや低いが実用性はあると考えられた。薬害は認められなかった。

(イ) 主要害虫に対する新農薬の防除効果

- ・ヤマノイモのナガイモコガに対する新農薬の防除効果について検討した（供試：ナガ

イモ「園試系6」）。グレーシア乳剤の2,000倍液散布は対照のトレボン乳剤1,000倍液に比べ効果が優り、無処理区との比較では効果が高かった

- ・ダイコンのネグサレセンチュウ類（キタネグサレセンチュウ）に対する新農薬の防除効果を検討した。ネマキック粒剤10kg/10a 播種前全面土壌混和は、対照のネマキック粒剤 15kg/10a 播種前全面土壌混和より効果がやや劣り、無処理との比較で効果は認められるがその程度は低い。このことから効果はやや低いが実用性があると考えられた。薬害は見られなかった。
- ・ネマキック液剤100倍/100L/10a 播種前全面散布後土壌混和は、対照のネマキック粒剤 15kg/10a播種前全面土壌混和より効果がやや劣り、無処理との比較で効果は認められるがその程度は低い。このことから、効果はやや低いが実用性があると考えられた。薬害は見られなかった。
- ・ゴボウのヒョウタンゾウムシに対する新農薬の防除効果を検討した。アグロスリン乳剤の2,000倍液散布及びアタブロン乳剤の2,000倍散布は、対照のノーモルト乳剤より効果が劣り、無処理と比較して効果は認められるがその程度は低かった。コテツフロアブルの2,000倍液散布は対照のノーモルト乳剤と効果がほぼ同等で無処理と比較して効果が高かった。
- ・ニンニクのネギコガに対する新農薬の防除効果を検討した（供試：福地ホワイ「黒石A」）。ダントツ水溶剤4,000倍液散布の防除効果があり実用性がある。ベネビア0D2,000倍液散布の防除効果があり実用性がある。
- ・ニンニクのチューリップサビダニに対する新農薬の防除効果を検討した（供試：福地ホワイ「黒石A」）。トクチオン乳剤の1,000倍液散布は、対照のハチハチ乳剤1,000倍液散布より効果はやや劣るが、防除効果があり実用性がある。
- ・ニンニクのイモグサレセンチュウに対する新農薬の防除効果を検討した（供試：福地ホワイ「黒石A」）。キルパー液剤 60L/10a ニンニク前作収穫後土壌表面散布混和後鎮圧

は、無処理との比較で効果はあった。また、キルパー液剤 60L/10a ニンニク前作収穫後土壌表面散布混和後被覆は、無処理との

比較で効果は高かった。いずれも薬害は見られなかった。

2 主要な野菜・畑作物の生育状況

(1) 野菜

ア ナガイモ

5月25日植付けの露地普通栽培とし、供試系統は「園試系6」（2年子）とした。

萌芽揃期は6月28日（平年並）、植付けから萌芽揃までの日数は34日（平年より1日少ない）であった。栽培期間を通して、地上部

の生育が平年並から平年を下回った。

総収量は、4,629kg/10a（平年比111%）、上物収量は1,400kg/10a（同94%）、平いも、こぶが多かったので、下物収量は平年より多かった（平年比：120%）。

表1 ナガイモの収量調査結果

年次	総収量 (kg/10a)	A品収量(kg/10a)				下物収量(kg/10a)					
		4L-3L	2L-L	M-2S	合計	平	こぶ・しわ	尻こぶ・リンゴ	曲がり	その他	合計
本年	4,629	1,176	221	0	1,400	2,325	608	120	114	62	3,229
平年	4,183	950	434	62	1,485	1,566	517	232	213	170	2,698
平年比(%)	111	119	51	0	94	148	118	52	54	36	120

注) 1 平年は平成19～29年の平均値。

2 A品収量は平成17年3月作成のJA全農あおもりやさしい出荷規格。

イ ニンニク

平成29年10月2日植付けの露地普通栽培とし、供試系統は福地ホワイト「黒石A系統」を供試した。

消雪が平年より2日遅くなったが、4月の気温が平年より高く推移し、りん片分化期が4月18日で平年より3日早まった。高温の影響で収穫期が6月27日と平年（7月4日）より6日

早かった。

6月27日の平均乾燥球重は101.8gで平年を上回り（平年比122%）、総収量は1,565kg/10a（同104%）、上物収量が1,371kg/10a（同112%）であった。下物収量は194kg/a（同68%）であった。

表2 ニンニクの収量調査結果

年次	総収量 (kg/a)	上物収量(kg/a)					下物収量(kg/a)			
		2L	L	M	S	合計	奇形	裂球	その他	合計
本年	156.5	7.8	129.3	0.0	0.0	137.1	7.7	11.7	0.0	19.4
平年	150.6	20.1	84.6	17.0	0.4	122.0	9.4	13.6	5.6	28.6
平年比(%)	104	39	153	0	0	112	82	86	0	68

注) 1 平年は平成22～29年の平均値。

2 上物収量は平成17年3月作成のJA全農あおもりやさしい出荷規格のA品、下物収量は同じくB～D品。

(2) 畑作物

ア 小麦

平成29年9月21日に播種し、品種は「ネバリゴシ」を供試した。

出芽期は平年並み、出芽も良好であった。越冬前は気温が低かったことから、草丈、莖数が平年を下回った。越冬後は、平年並みから高温傾向であったことから、幼穂形成期は平年より1日早い3月28日となった。その後の

気温は高めに推移し、出穂期が平年より4日早まった。穂数が平年より少なかったが、倒伏した。成熟期は平年より3日早い7月7日となった。

収量構成要素は、穂数632本/㎡(平年比91%)、千粒重35.2g(同102%)、一穂粒数29.8粒(同109%)、子実重59.5kg/a(同97%)となった。

表3 小麦の成熟期の生育及び収量調査結果

年次	出穂期 (月. 日)	成熟期 (月. 日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/㎡)	一穂粒数 (粒)	子実重 (kg/a)	容積重 (g/L)	千粒重 (g)
本年	5. 17	7. 6	88	7. 8	632	29. 8	59. 5	801	35. 2
平年	5. 21	7. 9	94	8. 0	693	27. 3	61. 4	802	34. 5
平年比(%)	[4日早]	[3日早]	94	98	91	109	97	100	102

注) 1 平年は平成19～28年の平均値。

イ 大豆

5月15日に播種し、品種は「おおすず」を供試した。

6、7月は少照、8月上中旬にかなりの低温く、その後は平年並みに推移した。そのため、分枝数が平年を下回った。開花期は平年より3日早い7月24日となった。

成熟期も平年より5日早い、10月9日となった。a当たり粗収量は22.3kg(平年比79%)となった。収量構成要素は、稈実莢数25.3莢/本(同92%)、一莢粒数1.6粒/莢(同111%)、百粒重は38.9g(同106%)となった。

表4 大豆の成熟期生育及び収量調査結果

年次	開花期 (月. 日)	成熟期 (月. 日)	主莖長 (cm)	分枝数 (本/本)	莖径 (mm)	主莖 節数 (節/本)	全重 (kg/a)	稈実 莢数 (莢/本)	粗百 粒重 (g)	莢内 粒数 (粒/莢)	粗子 実重 (kg/a)
本年	7. 24	10. 9	75. 5	1. 9	8. 86	16. 0	68. 8	25. 3	38. 9	1. 6	27. 4
平年	7. 27	10. 14	69. 2	2. 7	7. 93	15. 7	58. 1	27. 4	36. 8	1. 4	27. 7
平年比(%)	[3日早]	[5日早]	109	71	112	102	111	118	92	106	99

注) 平年は平成19～28年の平均値。

3 気象表・図

(1) 気象表

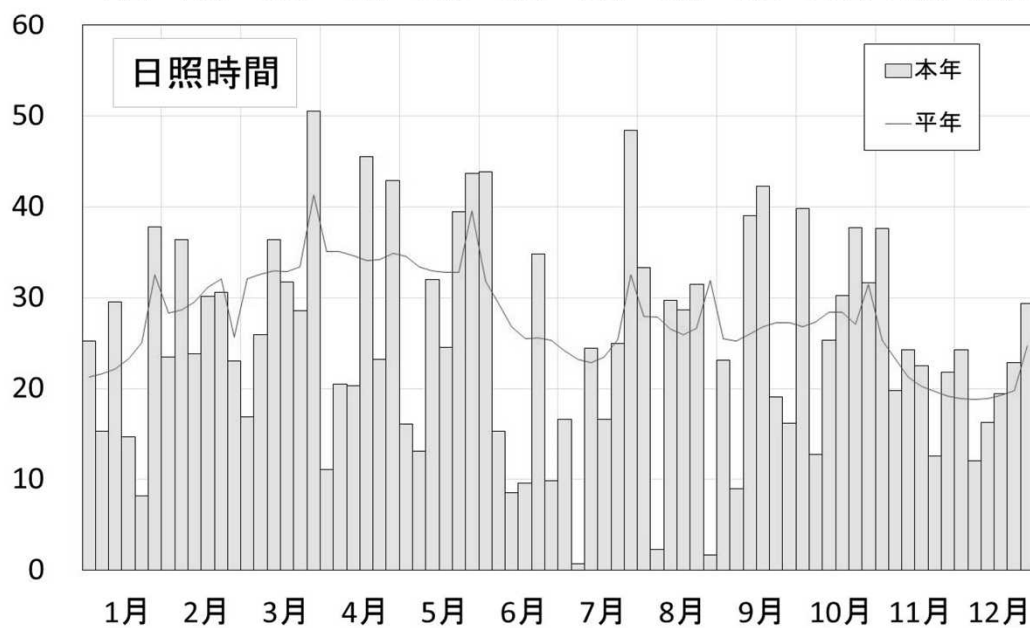
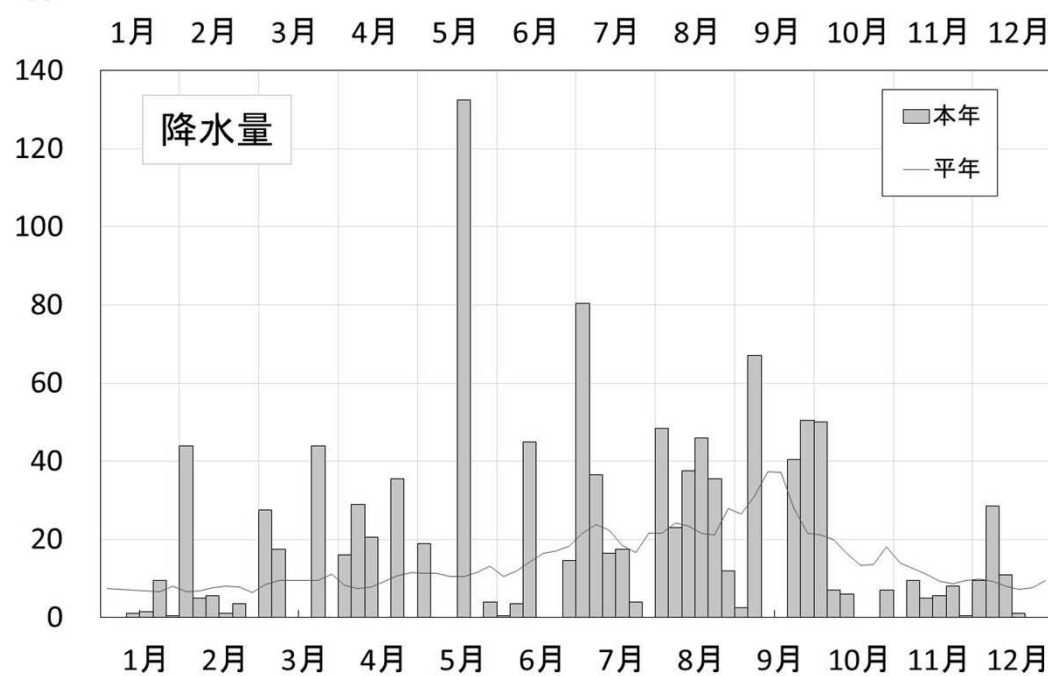
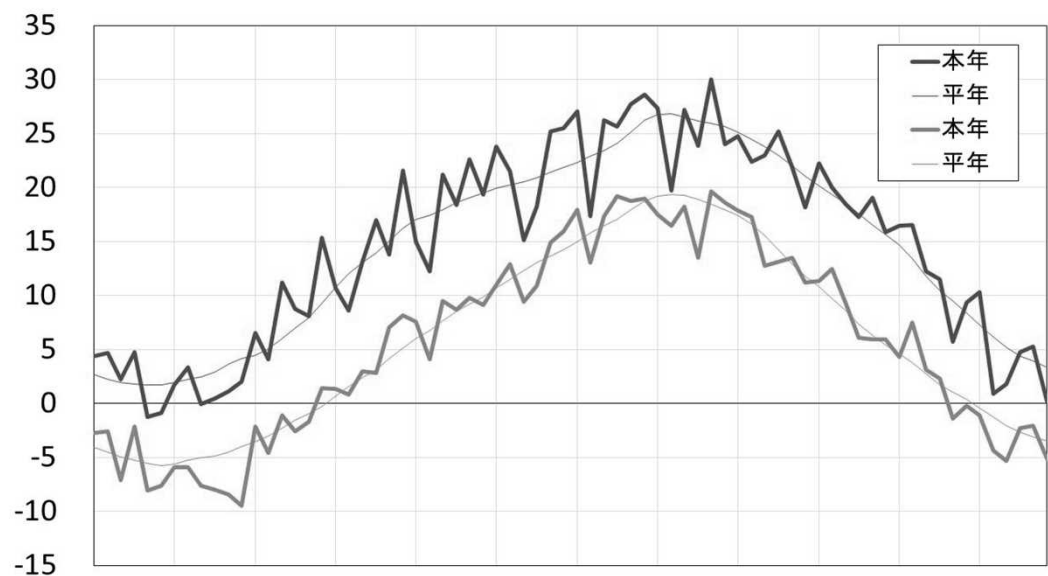
月	項 目	平均気温(℃)		最高気温(℃)		最低気温(℃)		降水量(mm)		日照時間(時間)	
	半 旬	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
1 月	第1半旬	0.8	-0.6	4.4	2.7	-2.8	-4.0	0.0	7.4	25.3	21.3
	第2半旬	0.8	-1.0	4.7	2.2	-2.6	-4.5	0.0	7.3	15.3	21.6
	第3半旬	-2.0	-1.4	2.2	1.9	-7.1	-4.9	1.0	7.1	29.5	22.2
	第4半旬	1.3	-1.5	4.8	1.8	-2.1	-5.3	1.5	6.7	14.7	23.3
	第5半旬	-4.2	-1.7	-1.2	1.8	-8.1	-5.5	9.5	6.7	8.2	25.0
	第6半旬	-3.8	-1.8	-0.9	1.7	-7.6	-5.7	0.5	8.1	37.8	32.5
2 月	第1半旬	-1.6	-1.7	1.7	2.0	-5.9	-5.6	44.0	6.5	23.5	28.3
	第2半旬	-0.9	-1.4	3.3	2.2	-5.9	-5.3	5.0	6.8	36.4	28.7
	第3半旬	-3.4	-1.1	-0.1	2.5	-7.6	-5.0	5.5	7.6	23.9	29.5
	第4半旬	-3.2	-0.8	0.5	2.9	-8.0	-4.9	1.0	8.0	30.2	31.1
	第5半旬	-3.4	-0.3	1.1	3.7	-8.5	-4.5	3.5	7.8	30.6	32.1
	第6半旬	-2.8	0.2	2.0	4.2	-9.5	-4.0	0.0	6.3	23.0	25.7
3 月	第1半旬	2.3	0.5	6.5	4.5	-2.1	-3.6	27.5	8.5	16.9	32.1
	第2半旬	0.1	1.0	4.1	5.1	-4.6	-3.0	17.5	9.4	25.9	32.6
	第3半旬	6.1	1.8	11.2	6.0	-1.1	-2.3	0.0	9.5	36.4	33.0
	第4半旬	2.6	2.7	8.7	7.0	-2.6	-1.5	0.0	9.4	31.7	32.9
	第5半旬	3.5	3.4	8.1	7.9	-1.7	-1.0	44.0	9.4	28.6	33.4
	第6半旬	9.3	4.4	15.4	9.2	1.4	-0.3	0.0	11.0	50.5	41.3
4 月	第1半旬	5.8	5.7	10.7	10.8	1.4	0.7	16.0	8.3	11.1	35.1
	第2半旬	4.1	6.7	8.6	12.0	0.8	1.6	29.0	7.5	20.5	35.1
	第3半旬	8.0	7.6	13.1	13.0	3.0	2.4	20.5	7.9	20.3	34.6
	第4半旬	9.6	8.5	17.0	14.0	2.8	3.2	0.0	9.2	45.5	34.1
	第5半旬	10.4	9.5	13.8	15.0	7.1	4.1	35.5	10.8	23.2	34.2
	第6半旬	14.9	10.6	21.6	16.2	8.2	5.1	0.0	11.4	42.9	34.9
5 月	第1半旬	10.9	11.4	15.0	17.0	7.6	6.0	19.0	11.3	16.1	34.5
	第2半旬	8.8	12.0	12.2	17.5	4.1	6.8	0.0	11.3	13.1	33.4
	第3半旬	15.1	12.6	21.2	17.9	9.5	7.7	0.0	10.6	32.0	33.0
	第4半旬	13.5	13.4	18.4	18.6	8.7	8.6	132.5	10.5	24.5	32.8
	第5半旬	16.5	13.9	22.6	19.0	9.8	9.2	0.0	11.5	39.5	32.8
	第6半旬	13.9	14.4	19.3	19.5	9.2	9.9	4.0	13.1	43.7	39.5
6 月	第1半旬	17.5	15.1	23.8	20.0	11.0	10.7	0.5	10.5	43.9	31.8
	第2半旬	16.6	15.5	21.5	20.2	12.9	11.5	3.5	11.9	15.3	29.3
	第3半旬	11.8	16.1	15.1	20.5	9.4	12.3	45.0	14.1	8.5	26.8
	第4半旬	14.0	16.6	18.2	20.9	10.9	13.1	0.0	16.4	9.6	25.5
	第5半旬	20.2	17.2	25.2	21.4	14.9	13.7	0.0	17.1	34.8	25.6
	第6半旬	20.6	17.8	25.5	21.9	16.0	14.2	14.5	18.4	9.9	25.3

注. 平年は、1986年（S61）～ 2015年（H27）の平均値。

月	項 目	平均気温(℃)		最高気温(℃)		最低気温(℃)		降水量(mm)		日照時間(時間)	
	半 旬	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	平年
7 月	第1半旬	21.7	18.3	27.1	22.4	17.9	15.0	80.5	21.6	16.7	24.1
	第2半旬	14.6	19.0	17.4	22.9	13.1	15.8	36.5	23.9	0.8	23.2
	第3半旬	21.4	19.6	26.2	23.5	17.3	16.5	16.5	22.4	24.5	22.8
	第4半旬	21.9	20.2	25.6	24.1	19.2	17.1	17.5	18.5	16.7	23.5
	第5半旬	22.9	21.1	27.8	25.1	18.8	17.9	4.0	16.6	25.0	25.4
	第6半旬	22.7	22.1	28.6	26.3	19.0	18.8	0.0	21.6	48.4	32.5
8 月	第1半旬	22.6	22.5	27.3	26.8	17.5	19.2	48.5	21.6	33.3	28.0
	第2半旬	17.6	22.6	19.7	26.8	16.4	19.3	23.0	24.1	2.3	27.9
	第3半旬	22.0	22.5	27.2	26.6	18.3	19.3	37.5	23.4	29.7	26.5
	第4半旬	18.3	22.1	23.9	26.2	13.5	18.9	46.0	21.5	28.7	25.9
	第5半旬	24.6	21.8	30.1	25.9	19.7	18.4	35.5	21.1	31.5	26.7
	第6半旬	20.7	21.5	24.0	25.7	18.6	17.9	12.0	28.0	1.7	31.9
9 月	第1半旬	21.1	21.0	24.8	25.2	17.8	17.4	2.5	26.6	23.1	25.5
	第2半旬	19.9	20.3	22.4	24.5	17.3	16.6	67.0	31.1	9.0	25.2
	第3半旬	17.8	19.4	23.0	23.8	12.8	15.6	0.0	37.4	39.1	26.0
	第4半旬	18.8	18.4	25.2	23.0	13.1	14.3	0.0	37.1	42.2	26.8
	第5半旬	17.8	17.3	21.9	22.0	13.5	12.9	40.5	28.0	19.1	27.3
	第6半旬	14.7	16.3	18.2	21.1	11.2	11.8	50.5	21.6	16.2	27.3
10 月	第1半旬	16.6	15.4	22.3	20.2	11.3	10.8	50.0	21.1	39.9	26.8
	第2半旬	16.2	14.4	20.0	19.3	12.4	9.8	7.0	20.0	12.7	27.3
	第3半旬	13.5	13.5	18.5	18.6	9.3	8.6	6.0	16.4	25.3	28.4
	第4半旬	11.1	12.4	17.3	17.6	6.1	7.4	0.0	13.3	30.3	28.4
	第5半旬	12.2	11.3	19.1	16.5	6.0	6.3	0.0	13.6	37.8	27.1
	第6半旬	10.8	10.5	15.9	15.6	5.9	5.4	7.0	18.1	31.7	31.5
11 月	第1半旬	10.1	9.6	16.5	14.7	4.3	4.6	0.0	14.0	37.7	25.4
	第2半旬	12.0	8.6	16.6	13.4	7.5	3.8	9.5	12.5	19.8	23.3
	第3半旬	7.5	7.2	12.2	11.8	3.1	2.7	5.0	11.1	24.3	21.3
	第4半旬	6.5	6.0	11.5	10.5	2.3	1.7	5.5	9.2	22.5	20.3
	第5半旬	2.1	5.1	5.7	9.5	-1.4	1.1	8.0	8.7	12.6	19.7
	第6半旬	5.0	4.2	9.3	8.4	-0.2	0.4	0.5	9.5	21.8	19.2
12 月	第1半旬	5.0	3.3	10.3	7.2	-1.1	-0.4	9.5	9.9	24.2	18.9
	第2半旬	-1.9	2.4	0.9	6.2	-4.4	-1.2	28.5	9.3	12.1	18.8
	第3半旬	-1.2	1.5	1.8	5.2	-5.3	-2.0	11.0	8.1	16.3	18.9
	第4半旬	1.7	0.8	4.7	4.4	-2.3	-2.7	1.0	7.3	19.5	19.3
	第5半旬	1.4	0.4	5.3	3.9	-2.1	-3.1	0.0	7.7	22.8	19.8
	第6半旬	-2.3	0.0	0.2	3.4	-5.1	-3.5	0.0	9.4	29.4	24.7

注. 平年は、1986年（S61）～ 2015年（H27）の平均値。

(2) 気象図



Ⅱ 試験研究成果・普及情報の公表及び研修・技術協力

1 試験研究成果・普及情報

(1) 普及技術情報

区 分	事 項 名
指導参考資料	県内で初めて確認されたナスにおける根腐疫病の特徴
	県南地域のながいも早植栽培においてウイルスフリー由来50g未満の小種子を利用した場合の生育特性、収量及び品質
	県南地域におけるながいも早植栽培の生育特性、収量及び品質（5月中旬植えの追加）
	反射シートの利用によるながいも「園試系6」のむかご生産量向上
	催芽切いもの利用によるながいも「園試系6」のむかご生産量向上
	りん片分化期後の積算気温からみたにんにくマルチ栽培の収穫期間の目安
	冬春播きたまねぎ栽培の適品種
農薬関係資料	やまのいものアブラムシ類に対するピリフルキナゾン水和剤（コルト顆粒水和剤）及びシアントラニプロール水和剤（ベネビア0D）の使い方
	にんじんの黒葉枯病に対するピリベンカルブ水和剤（ファンタジスタ顆粒水和剤）の使い方
	ごぼうのヒョウタンゴウムシ類に対するメタフルミゾン水和剤（アクセルフロアブル）の使い方
	かぼちゃのカボチャミバエに対するクロチアニジン水溶剤（ダントツ水溶剤）の使い方

(2) 刊行物

- ア 平成29年度 試験成績概要集 （平成30年5月、60部発行）
- イ 野菜研ニュースNo.22 （平成30年8月、ホームページ）
- ウ 野菜研ニュースNo.23 （平成31年3月、ホームページ）

(3) 学会・研究会等報告

著者、発表者	題名	雑誌名等 (号、ページ)	発表月	投稿先	論文/講演 要旨
青山 理絵	ニンニク連作ほ場におけるイモグサレセンチュウの発消長	日本線虫学会第26回大会講演要旨集, No. 48. 2, p. 88	平成30年9月	日本線虫学会	講演要旨
加賀 友紀子	青森県におけるゴボウ黒条病の発生	北日本病害虫研究会報, 第69号, p. 10-12	平成30年12月	北日本病害虫研究会	論文
町田 創・藤島 弘行 *(*山形県庄内総合支庁)	東北地域の施設栽培における夏季マルチ開放処理が地温に及ぼす影響	日本気象学会2019年全国大会講演要旨集, p. 158	平成31年3月	日本農業気象学会	講演要旨
町田 創	低温遭遇量の違いがニンニク‘福地ホワイト（黒石A系統）’のりん片分化に及ぼす影響（第1報）	東北の農業気象研究発表要旨, 第63号, p. 26-27	平成31年3月	日本農業気象学会東北支部	講演要旨

(4) 試験研究成果発表会

ア 日時

平成31年2月20日（金）

イ 場所

三沢市国際交流教育センター（三沢市大字三沢字園沢230-1）

ウ 参集範囲

（独）種苗管理センター、農家、農業関係団体、各市町村、県（農林水産部各課、各地域県民局地域農林水産部、病虫害防除所、営農大学校）、産技センター（関係農林部門研究所）

エ 発表内容

（ア）りん片分化期後の積算気温からみたニンニクの収穫期間の目安

栽培部 主任研究員 今 智穂美

（イ）青森県における冬春まきタマネギの適品種と無マルチ栽培の効果

品種開発部 研究管理員 東 秀典

（ウ）ナガイモの種いもが不足した際の規格外小種子の利用方法

栽培部 研究員 齊藤 生

（エ）反射シートと催芽切りいも利用によるナガイモのむかご生産量向上

品種開発部 研究管理員 前嶋 敦夫

（オ）ナスにおける根腐疫病の特徴

病虫害部 研究管理員 近藤 亨

（カ）ナガイモ及びニンニク品種育成の状況

品種開発部 研究管理員 前嶋 敦夫

研究管理員 鹿内 靖浩

（キ）ニンニクのイモグサレセンチュウ試験の取組み

病虫害部 研究員 青山 理絵

(5) 公開デー

ア 日時

平成30年9月14日（金）

イ 場所

野菜研究所（六戸町大字犬落瀬字柳沢91）

ウ 来場者

600人

エ 主な内容

（ア）ミニ講座、所内見学

（イ）野菜販売、加工品など物産販売

（ウ）加工品の試食

（エ）農業機械、ハウス資材展示

（オ）併催行事 にんにく共進会、最新農機実演会

(6) 一般雑誌・ラジオ・新聞・ホームページ

ア 一般雑誌

題 名	巻号	頁	所属	氏名
病虫部の研究紹介	植物防疫 2月号	p67	病虫部	新藤 潤一

イ ラジオ

月. 日	発信先	発信内容	所属	氏名
5月19日	RAB「農事放送」	ながいもの高品質・多収生産技術について	栽培部	齋藤 生
6月16日	RAB「農事放送」	にんにくの高品質乾燥技術について	栽培部	今 智穂美
8月25日	RAB「農事放送」	夏秋いちごの高品質生産のポイントについて	栽培部	町田 創
12月1日	RAB「農事放送」	ねぎの春まき栽培の育苗管理について	栽培部	谷川 法聖
1月19日	RAB「農事放送」	春植えタマネギの管理について	栽培部	東 秀典

ウ 新聞

月. 日	発信先	発信内容	所属	氏名
5月14日	農業共済新聞	夏だいこんのキスジノミハムシに対する効果的な防除体系	病虫部	新藤 潤一

エ ホームページ

月. 日	発信先	発信内容	所属	氏名
8月22日	(一社)農業改良普及支援協会	みんなの農業広場 ナガイモにおけるマルチローターによる 薬剤散布試験	病虫部	新藤 潤一

(7) 表彰

受賞者	月 日	受賞名	概要（又は理由）
種苗生産支援チーム 栽培部長 細田 洋一、 病虫部長 新藤 潤一、 研究管理員 前嶋 敦夫、 研究管理員 東 秀典、研 究管理員 鹿内 靖浩、研 究管理員 近藤 亨、主 任研究員 対馬 由記 子、研究員 加賀 友紀 子、研究員 落合 祐介	3月19日	優良種苗提供・技術支援を 通じた青森県産ニンニク・ ナガイモ安定生産への長年 の貢献	昭和58年度より、現在まで長年にわたり、ウイルスチェックなどの厳格な栽培管理により、一貫してウイルスフリーの原原種を生産・配布することで、本県のニンニク、ナガイモ安定生産へ寄与した。また、現場の種苗生産場面でも活かせる反射シートを利用したむかご増収技術の開発、田子町の「たっこ1号」の品種登録及び種苗供給の技術支援をした。

2 研修・技術協力

(1) 農業ドクター派遣

担当者	名称	内容	日付	依頼者
なし				

(2) 講師派遣

担当者	名称	内容	日付	依頼者
鹿内 靖浩、新藤 潤一	第1回たっこオリジナル品種増殖検討委員会	増殖ほにおけるニンニクのウイルス病対策	4月17日	田子町
今 智穂美、新藤 潤一、加賀 友紀子、青山 理絵	第1回にんにく高品質安定生産技術研修会	①気象要因からの収穫予測と収穫後の乾燥のポイント②チューリップサビダニの生態と防除試験③イモグサレセンチュウの生態と防除試験	5月31日	県農産園芸課
今 智穂美	にんにく乾燥講習会	露地にんにくの乾燥方法について	6月1日	津軽みらい農協
新藤 潤一、町田 創	夏秋いちご生産技術研修会	①いちごの病害虫の種類と防除方法について②最近の研究成果について	7月3日	県農産園芸課
今 智穂美、齋藤 生、新藤 潤一、加賀 友紀子	第1回ながいも栽培技術研修会	①作況ほ生育状況②初期生育を揃えるガンク切除の時期と小種子利用時の植付時期の考え方③病害虫の発生状況と防除のポイント	7月6日	県農産園芸課
細田 洋一、谷川 法聖	土づくり指導力向上研修会	硝酸の分析方法、施肥ナビの使用方法、土壌サンプリング方法について	7月13日	県食の安全・安心推進課
今 智穂美、鹿内 靖浩、新藤 潤一、青山 理絵	第2回にんにく高品質安定生産技術研修会	①大型コンテナを活用した効率的な乾燥技術について②野菜研における優良種苗（原原種）生産について③チューリップサビダニの生態と防除④イモグサレセンチュウの生態と酸性フクシン染色による収穫時期判定	7月26日	県農産園芸課
町田 創	専門技術強化研修（野菜）	ICT利用型養液システムを利用した夏秋トマト栽培	7月30日	県農林水産政策課
細田 洋一、齋藤 生、今 満、前嶋 敦夫	第2回ながいも栽培技術研修会	野菜研の平成30年度の試験実施状況	8月3日	県農産園芸課
新藤 潤一	平成30年度ながいも省力技術現地検討会	ドローンによる防除について	8月7日	県農産園芸課、全国農業改良普及支援協会
齋藤 生、新藤 潤一	平成30年度ながいもプロフェッショナル養成所第1回研修	①ながいもの生理生態について②病害虫の生態と防除技術について	8月24、25日	県農産園芸課、全農青森県本部
前嶋 敦夫	「ながいも担い手育成塾」集合研修	優良種苗の生産（原原種）と種苗更新の重要性について	9月11日	県農産園芸課

担当者	名称	内容	日付	依頼者
新藤 潤一	営農 大学校講義		10月30日	営農 大学校
加賀 友紀子	営農 大学校講義		11月12日	営農 大学校
近藤 亨	たまねぎ栽培研修会	たまねぎの主要病害と防除について	1月16日	県農村整備課
鹿内 靖浩、 今 智穂美	にんにくフォーラム	①生産者段階での優良種苗増殖技術の要点 ②省力的なにんにく乾燥技術の事例紹介	1月17日	県農産園芸課、 全農青森県本部
今 智穂美	加工・業務用野菜産地 拡大フォーラム	大型コンテナを活用したたまねぎ省力乾燥 技術	1月24日	県農産園芸課、 全農青森県本部
新藤 潤一、 前嶋 敦夫、 谷川 法聖	ながいも産地力強化戦 略推進大会	①篤農家技術の情報収集と解析結果につい て ②無人航空機「ドローン」による防除方法 の検討結果について	1月25日	県農産園芸課、 全農青森県本部
近藤 亨	にんにく優良種苗生産 指導技術研修会	にんにくのウイルス病と防除対策について	2月5日	県農産園芸課
細田 洋一、 新藤 潤一、 前嶋 敦夫、 今 智穂美、 谷川 法聖、 齋藤 生	平成30年度ながいもプ ロフェッショナル養成 所第3回研修	①病虫害防除について、②ながいも生産技 術について、③ながいもの品種開発につい て	2月12-13 日	県農産園芸課、 全農青森県本部
新藤 潤一、 青山 理絵	にんにく冬季研修会	イモグサレセンチュウ等の生態と研究状況	2月28日	八戸農業協同組 合

(3) 審査員派遣

担当者	審査会名	内容	日付	依頼者	開催地
鹿内 靖浩 新藤 潤一	にんにく優良種苗ほ場審査	にんにく優良種苗増殖圃のウイルスチェック	5月1日	全農青森県本部	金木、十和田市、岩手県
前嶋 敦夫 近藤 亨	第1回ながいも原種ほ場検査会	ナガイモの原種ほ場の状況確認	7月27日	全農青森県本部	金木、七戸町、十和田市、六戸町、八戸市
今 満 前嶋 敦夫	第2回ながいも原種ほ場検査会	ナガイモの原種ほ場の状況確認	8月17日	全農青森県本部	金木、七戸町、十和田市、六戸町、八戸市
前嶋 敦夫 近藤 亨	第3回ながいも原種ほ場検査会	ナガイモの原種ほ場の状況確認	9月10日	全農青森県本部	金木、七戸町、十和田市、六戸町、八戸市
鹿内 靖浩 新藤 潤一	たっこにんにく共進会審査会	審査員として出席	9月13日	田子町	田子町
西澤 登志樹 細田 洋一 鹿内 靖浩 新藤 潤一	青森県にんにく共進会	審査員として出席	9月13日	全農青森県本部	六戸町
今 智穂美	青森県営農大学校プロジェクト発表会・意見交換会	審査員として出席	12月26日	営農大学校	東北町
西澤 登志樹 齋藤 生	青森県ながいも共進会	審査員として出席	1月24日	全農青森県本部	三沢市
細田 洋一	放射性物質循環環境移行低減化調査検討委員会	研究調査の成績の検討	3月4日	(公財) 環境科学研究所	東京都

(4) 会議・研究会

日付	場所	主催者	担当者	内容
4月5日	東京都	農林水産省消費・安全局	新藤 潤一	平成30年度薬剤抵抗性病害虫・難防除雑草等の防除対策の高度化事業に係る企画説明会
4月13日	青森市	県食の安全・安心推進課	新藤 潤一	平成30年度食の安全・安心推進課業務担当者会議
4月17日	田子町	田子町	新藤 潤一、鹿内 靖浩	「たっこにんにく」増殖検討委員会
4月23日	青森市	県農産園芸課	今 満、新藤 潤一	平成30年度農産園芸課業務担当者会議
4月24日	東京都	農研機構	青山 理絵	S I P 抗線虫資材設計会議
4月25日	青森市	県農林水産政策課	細田 洋一、今 智穂美、谷川 法聖	「労働力不足に対応した機械化農業推進事業」最先端省力化農業機械選定会議
4月26-27日	山形県	(株)ルートレック・ネットワークス	町田 創	経営体強化プロジェクト平成30年度試験設計検討会
5月9日	青森市	全農青森県本部	細田 洋一	青森県施肥合理化推進協議会幹事会
5月22日	六戸町	六戸町	西澤 登志樹	平成30年度六戸農業振興対策協議会委員・幹事合同会議
5月23日	青森市	青森県植物防疫協会	新藤 潤一	青森県植物防疫協会幹事会

日付	場所	主催者	担当者	内容
5月24日	青森市	青森産技	西澤 登志樹、今 満	第1回農林部門所長等会議
5月24日	青森市	県食の安全・安心推進課	近藤 亨	第1回青森県農薬適正使用推進会議
5月29日	青森市	病虫害防除所	新藤 潤一、近藤 亨、青山 理絵	平成30年度病虫害発生予察会議（6月予報）
6月20日	五所川原市	全農青森県本部	谷川 法聖	施肥合理化推進協議会野菜・花き部会中間現地検討会
6月21日	東京都	全国農業関係試験研究場所長会	西澤 登志樹	全国農業関係試験研究場所長
6月26-27日	八戸市	八戸市	町田 創	第69回全日本野菜品種審査会ミニトマト（夏秋どり）
7月3日	茨城県	農研機構	近藤 亨	日台植物ウイルス病シンポジウム
7月4-5日	青森市	東北農業研究センター	細田 洋一、今 智穂美、谷川 法聖	平成30年度東北試験研究推進会議生産環境推進部会土壌肥料研究会（夏期）
7月11日	青森市	県農産園芸課	今 満、鹿内 靖浩	第1回青森県にんにく優良種苗生産指導プロジェクトチーム会議
7月12日	東京都	広域財団法人環境科学技術研究所	細田 洋一	第1回放射性物質環境移行低減化調査検討委員会
7月19日	秋田市	東北地域農業関係試験場所長会	西澤 登志樹	平成30年度東北地域農業関係試験場所長会議
7月20日	岩手県	(株)ルートレック・ネットワークス	町田 創	経営体強化プロジェクト経営評価・アンケート調査に係る会議
7月24-25日	岩手県	岩手県農業研究センター他	前嶋 敦夫、対馬 由記子、今 智穂美、町田 創	平成30年度東北農業試験研究推進会議野菜花き推進部会野菜研究会（夏期）
7月30-8月1日	熊本県	農研機構	加賀 友紀子	SIP事業中間検討会および現地視察
8月9日	青森市	全農青森県本部	西澤 登志樹、今 満、鹿内 靖浩	にんにく優良種苗検討会
8月21日	三沢市	全農青森県本部	谷川 法聖	施肥合理化推進協議会野菜・花き部会中間現地検討会
8月23-24日	岩手県	東北農業研究センター	近藤 亨	平成30年度東北試験研究推進会議生産環境推進部会病虫害研究会（夏期）
8月27-28日	宮城県	東北農業研究センター	谷川 法聖、齋藤 生	平成30年度東北試験研究推進会議作物生産推進部会作業技術研究会
8月30-31日	東京都	農研機構	加賀 友紀子	SIP事業平成30年度中間検討会
8月29日	六戸町他5か所	県農産園芸課	今 満、新藤 潤一、前嶋 敦夫	平成30年度ながいも長大系統現地検討会
8月29-30日	八戸市	八戸市	町田 創	第69回全日本野菜品種審査会ミニトマト（夏秋どり）2次
9月5-6日	熊本市	線虫学会	青山 理絵	第26回線虫学会定期大会
9月18日	十和田、七戸町他4か所	全農青森県本部	今 満、近藤 亨、前嶋 敦夫	平成30年度JAながいも採種連絡協議会現地検討会
9月27-28日	山形県	日本植物病理学会	近藤 亨	日本植物病理学会東北部会

日付	場所	主催者	担当者	内容
10月22日	北海道	農研機構	東 秀典	平成30年度北海道地域マッチングフォーラム
10月22日	青森市	県食の安全・安心推進課	新藤 潤一	平成30年度農作物病害虫防除指針第1回編成会議
10月22日	青森市	県農産園芸課	今 満、新藤 潤一、鹿内 靖浩	第2回青森県にんにく優良種苗生産指導プロジェクトチーム会議
10月31日	青森市	病害虫防除所	新藤 潤一、近藤 亨	平成30年度北海道・東北地区植物防疫協議会資料作成会議
11月1-2日	岩手県	日本植物防疫協会	新藤 潤一、近藤 亨、加賀 友紀子、青山 理絵	平成30年度新農薬実用化試験（稲・野菜等）東北地域成績検討会
11月4-7日	北海道	帯広川西農協他	前嶋 敦夫	平成30年度ながいもプロフェッショナル養成所第2回研修（北海道視察研修）
11月8-9日	石川県	農研機構	新藤 潤一、加賀 友紀子	S I P トマト地下部病害虫の新防除体系の開発マニュアル検討会
11月13日	弘前市	農林総研	細田 潤一、今 智穂美、谷川 法聖、加賀 友紀子	転炉スラグ活用シンポジウム
11月26日	青森市	県食の安全・安心推進課	新藤 潤一、近藤 亨、加賀 友紀子、町田 創	平成31年度農作物病害虫防除指針「野菜部会」
11月27日	茨城県	農研機構	谷川 法聖	第215回農林交流センターワークショップ「植物科学・作物育種におけるフェノーム解析」
11月27日	おいらせ町	吉田種苗(株)	齋藤 生	ながいも掘り採り検討会
11月28日	青森市	青森県植物防疫協会	新藤 潤一、近藤 亨	平成30年度農薬展示圃成績検討会
11月28日	青森市	全農青森県本部	今 智穂美	平成30年度肥料展示ほ総合成績検討会
11月29日	福岡県	農研機構	青山 理絵	S I P 抗線虫資材中間検討会
12月7日	青森市	食の安全・安心推進課	近藤 亨	平成31年度農作物病害虫防除指針第2回編成会議
12月13日	東京都	日本植物防疫協会	加賀 友紀子	平成30年度新農薬実用化試験（生物農薬）成績検討会
1月17日	十和田市	十和田おいらせ農業共同組合	西澤 登志樹、鹿内 靖浩、対馬 由記子、今 智穂美、谷川 法聖	平成30年度にんにくフォーラム
1月18日	東京都	農研機構	加賀 友紀子	SIP事業年度末検討会
1月22-23日	三重県	農研機構	前嶋 敦夫、東 秀典	実需者ニーズに応じた加工適性を持つ野菜品種等の開発
1月24-25日	岩手県	東北農業研究センター	新藤 潤一、近藤 亨、加賀 友紀子、青山 理絵	平成30年度東北農業試験研究推進会議生産環境推進部会病害虫研究会
1月25日	三沢市	おいらせ農業共同組合	西澤 登志樹、新藤 潤一、東 秀典、前嶋 敦夫、対馬 由記子、今 智穂美、谷川 法聖、齋藤 生	平成30年度ながいも産地力強化戦略推進大会
1月29日	八戸市	八戸市	鹿内 靖浩	八戸農業経営振興センター成績及び設計検討会

日付	場所	主催者	担当者	内容
1月31- 2月1日	岩手県	東北農業研究センター	今 満、東 秀典、対馬 由記子、今 智穂美、谷川 法聖、齋藤 生、町田 創	平成30年度東北農業試験研究推進会議野菜花き推進部会
2月8日	千葉県	雪印種苗(株)	谷川 法聖	第2回緑肥を考える会
2月15日	青森市	県農林水産政策課	新藤 潤一、東 秀典、谷川 法聖、町田 創	平成30年度普及指導員調査研究成績検討会（野菜）
2月21-22日	岩手県	北日本病害虫研究会	近藤 亨、加賀 友紀子、青山 理絵	第72回北日本病害虫研究発表会
2月25日	十和田市	県農産園芸課	前嶋 敦夫	平成30年度ながいも優良種苗検討会
2月25日	東京都	(株)ルートレック・ネットワークス	町田 創	経営体強化プロジェクト平成30年度成績検討会
2月26日	青森市	県植物防疫協会	新藤 潤一、谷川 法聖	展示圃設置に関する合同運営委員会
2月26日	東京都	農研機構	加賀 友紀子	SIP平成30年度成績検討会
2月27日	茨城県	農業環境変動研究センター	谷川 法聖	第9回農業環境イベントリー研究会
3月4日	東京都	広域財団法人環境科学技術研究所	細田 洋一	第2回放射性物質環境移行低減化調査検討委員会
3月12-13日	東京都	農研機構 農業環境変動研究センター	齋藤 生	第12回農業気象研究会
3月15日	青森市	県農産園芸課	鹿内 靖浩、対馬 由記子	第3回青森県にんにく優良種苗生産指導プロジェクトチーム会議
3月20日	青森市	県農産園芸課	西澤 登志樹	平成30年度青森県ながいも戦略推進協議会
3月25日	青森市	県農産園芸課	齋藤 生	青森県主要農作物品種育成懇談会（大豆）
3月27-29日	静岡県	日本農業気象学会	町田 創	日本農業気象学会2019年全国大会ポスター発表会

(5) 視察受け入れ

受入月日	案内件数	来所者数	視察、見学内容
6月 5日	十和田おいらせ農業協同組合にんにく生産者	36	ニンニクの栽培法について
6月 14日	ゆうき青森農業協同組合青年部協議会	24	ナガイモ、ニンニク等の試験内容について
6月 27日	十勝川西長いも生産グループ	33	ナガイモの根腐れ病対策について
6月 27日	農業生産法人健康家族	4	ニンニクの栽培法について
7月 4日	沖揚平振興会	15	圃場見学及び研究成果について
7月 20日	宮城県亘理生産者	3	ニンニクの乾燥調整法及び貯蔵について
7月 30日	六戸町教育振興協議会	20	施設見学等
9月 5日	宮城県名取市農業委員会	33	路地野菜等栽培技術の研究内容について
9月 7日	(株)たから	5	圃場見学及び研究成果について
9月 14日	上北地域いきいきヤングファーマー	21	優良種苗増殖、試験内容等について
9月 18日	六戸町立大曲小学校	50	圃場・施設見学
10月 10日	(株)サカタのタネ	4	ニンニク培養、増殖現場の視察
10月 11日	十勝中央青果団地運営協議会	6	ナガイモの病害虫及び栽培法について
11月 15日	秋田県由利本荘岩城産直会	26	上北地方の野菜全般について
12月 7日	音更町農協	20	ナガイモの栽培法について
3月 5日	農業法人にしめや	6	ニンニクの種苗の増殖方法について
3月 7日	農業生産法人健康家族	6	ニンニクの生育状況及び管理について
計		312	

(6) 研修受け入れ

ア 新規任用普及指導員専門技術向上研修

受け入れ部所	研修部門	人数	期間
なし			

イ インターンシップ

受け入れ部所	研修部門	所属・人数	期間
栽培部 品種開発部 病虫害部	野菜	弘前南高等学校・16名	7月24日

Ⅲ 職員研修

1 国内研修

職・氏名	所属部所	研修内容	派遣先	派遣期間
部長 新藤潤一	病虫害部	平成30年度人事評価研修	農林総合研究所	5月25日
主任研究員 谷川法聖	栽培部	知的財産制度説明会	青森県	7月11日
研究員 町田 創	栽培部	平成30年度専門技術強化研修 (野菜第1回)	青森県	7月30日
研究員 町田 創	栽培部	経営体強化プロジェクト 霜 害対策試験に係る打合せ及び 熱電対の使い方研修	岩手県	10月10日
主任研究員 対馬由記子	品種開発部	土壌管理指導者養成研修	一般財団法人日本土 壌協会、青森県	11月6-7日
主任研究員 今智穂美	栽培部	主査第2部研修	青森県	12月6-7日

2 県・産技研修

(1) 青森県・産技本部・人材育成委員会

職・氏名	研修内容	派遣先	派遣期間
主任研究員 対馬由記子	S T P 分析研修	青森産技農総研藤 坂稲作部	6月18日
所長 西澤 登志樹 研究管理監 今 満 主事 中川原 廣守	メンタルヘルス及び安全衛生研修会	青森産技安全衛生 推進委員会	7月18日
研究管理員 前嶋 敦夫	クレーム対応研修	県水産ビル	8月21日
主任研究員 今 智穂美	写真撮影スキル向上研修	青森産技	8月30日
栽培部長 細田 洋一 主任研究員 対馬 由記子	衛星データ等を活用したリモートセ ンシング技術に関する研修会	県水産ビル	12月4日
栽培部長 細田 洋一	研究部長クラス研修	青森産技人材育成 委員会	3月1日

(2) 野菜研究所独自研修

項目	研修内容	講師	研修期間
野菜研セミナー	クレーム対応研修 写真撮影スキル向上研修	品種開発部 前嶋 敦夫 栽培部 今 智穂美	10月24日
野菜研セミナー	農林総合研究所藤坂稲作部での稲 の新品種育成方法	農総研藤坂稲作部 須藤 充	2月22日

Ⅳ 種苗の生産と配付

1 作物の原種の採種

種 類	品 種	面積 (a)	採種量 (kg)	備考 採種場所等
ナタネ	キザキノナタネ	0	0	
ソバ	階上早生	0	0	

2 作物の原種の採種

種 類	品 種	面積 (a)	採種量 (kg)	備考 採種場所等
ナタネ	キザキノナタネ	0	0	野菜研究所
ソバ	階上早生	210	1,050	野菜研究所

3 種苗等の配付

種 類	品 種	数量 (kg)	配 付 先
ソバ	階上早生	500	青森県農産物改良協会
ナタネ	キザキノナタネ	15	青森県農産物改良協会
ナガイモ	園試系 6	260 むかご	全農青森県本部
ニンニク	福地ホワイト (黒石A系統)	450 りん球 珠芽	全農青森県本部

注．旧年産の種子も含む。

Ⅴ 資格取得

職・氏名	所属部所	資格内容
なし		

VI 総 務

1 位置・土地・建物

青森県上北郡六戸町大字犬落瀬字柳沢91

北緯 40° 38′

東経 141° 21′

標高 53m

土地	3,557 a
建物敷地	138 a
畑	2,066 a
道路・その他	1,353 a
建物	9,177 m ²

2 所掌事務・分掌事務

(1) 所掌事務

- ア 野菜及び畑作物の試験研究に関すること。
- イ 野菜及び畑作物の種苗の育成及び配布に関すること。

(2) 栽培部の分掌事務

- ア 野菜研究所の庶務に関すること。
- イ 野菜の栽培改善の試験研究に関すること。
- ウ 野菜に係る農業機械及び農業施設の利用及び改善の試験研究に関すること。
- エ 野菜の施肥改善、作物栄養の試験研究に関すること。
- オ 野菜の鮮度保持及び貯蔵の試験研究に関すること。

(3) 品種開発部の分掌事務

- ア 野菜及び畑作物の品種改良の試験研究に関すること。
- イ 野菜の品種の適応性等の試験研究に関すること。
- ウ 野菜の種苗生産に関すること。
- エ ソバ、ナタネの原原種の生産及び原種の増殖に関すること。

(4) 病虫部の分掌事務

- ア 野菜の病害虫防除の試験研究に関すること。

3 組織・職員

(1) 組織・職員数

人員：職員26名（プロパー職員14名、派遣職員6名、非常勤職員6名）

区 分	研究職員	事務職員	技能技師		非常勤職員	計
所 長	1					1
栽 培 部	5				2	7
研 究						
庶務・業務		※2	3		1	6
品種開発部	5					5
病 虫 部	4				3	7
計	15	2	3		6	26

※農産物加工研究所と兼務

4 事務分担

(1) 所長

特 命 事 項	職 名	氏 名
1 所の管理、運営の総括に関する事	所 長	西澤 登志樹

(2) 研究管理監

分 担 事 務	職 名	氏 名
1 研究項目の企画、立案および調整並びに青森県産業技術センタ ー本部等との連絡調整に関する事	研究管理監 品種開発部長事 務取扱	今 満
2 印章の管守に関する事		
3 所内見学者の調整に関する事		
4 研修生に関する事		
5 部の分掌に属さない事務の総轄に関する事		
6 その他所長の特命に関する事		

(3) 栽培部

(試験研究)

部 長 細田 洋一

分 担 事 務	主 担	副 担
1 栽培部に係る業務の総括に関する事	部長 細田 洋一	副部長 (主任研究員) 今 智穂美
2 野菜の栽培・貯蔵に関する渉外、指導及び研修全般に関する事		
3 あおりながいも産地改革推進事業のうち篤農家技術の解析に 関する事		
1 部に係る業務の総括補佐に関する事	副部長 (主任研究員) 今 智穂美	主任研究員 谷川 法聖 研究員 町田 創
2 ニンニクイモグサレセンチュウ撲滅対策事業のうち乾燥調整技 術に関する事		
3 水田を活用した野菜産地拡大事業のうちたまねぎ省力乾燥技術 に関する事		
4 野菜の機械及び機械化に関する事		
5 ナガイモの作況試験に関する事		
1 青森ブランド野菜の高品質安定生産技術のうちナガイモに関す ること	主任研究員 谷川 法聖	主任研究員 今 智穂美 研究員 齋藤 生
2 新たな土壌管理による高品質農産物生産技術の開発に関する事		
3 労働力不足に対応した機械化農業推進事業に関する事		
4 作物栄養、土壌管理に関する事		
5 ニンニクの作況試験に関する事		
1 青森ブランド野菜の高品質安定生産技術のうちナガイモに関す ること	研究員 齋藤 生	部 長 細田 洋一 主任研究員 谷川 法聖
2 あおりながいも産地改革推進事業のうちナガイモの生産性向 上へ向けた高品質多収技術に関する事		
3 野菜の貯蔵・鮮度保持に関する事		
4 加工・業務用野菜に関する事		
5 小麦・大豆作況試験に関する事		

1 青森ブランド野菜の高品質安定生産技術のうちイチゴに関する こと 2 パイプハウスに導入できる低コスト省力化を実現する養液土耕 ・環境制御システムの開発に関すること 3 野菜の生育調節剤・除草剤に関すること 4 農業施設、資材の利用に関すること 5 気象観測・作況試験・生産情報の編集に関すること	研究員 町田 創	部長 細田 洋一 研究員 齋藤 生
1 試験研究の補助に関すること	非常勤労務員 佐藤 渚 松村 沙織	

(事務関係)

部長

細田 洋一

分 担 事 務	主 担	副 担
1 庶務に係る業務の総括に関すること 2 印章の管守に関すること 3 行事予定の管理に関すること 4 労働安全衛生に関すること 5 情報公開及び個人情報保護等に関すること 6 セクハラ相談に関すること	部長 細田 洋一	主 査 中村 平 主 事 中川原 廣守
1 予算執行管理に関すること 2 収入に関すること 3 支出契約決議に関すること 4 財産及び物品の管理に関すること 5 車両の配車等に関すること	主 査 中村 平	主 事 中川原 廣守 非常勤労務員 田中 礼子
1 職員の服務に関すること 2 職員の福利厚生に関すること 3 労働安全衛生に関すること 4 非常勤職員等に関すること 5 庶務関係の報告に関すること 6 庁舎内外の清掃・整備に関すること	主 事 中川原 廣守	主 査 中村 平 非常勤労務員 田中 礼子
1 文書の収受、発送及び保管に関すること 2 服務関係書類の整理に関すること 3 物品・図書の管理の補助に関すること 4 経理事務の補助に関すること 5 復命書及び旅行管理簿の整理に関すること	非常勤労務員 田中 礼子	主 査 中村 平 主 事 中川原廣守
1 農場運営方針の推進に関すること 2 耕作作業の改善・合理化に関すること 3 農場員の作業指導に関すること 4 農場機械等の整備及び管理に関すること	技能技師 山本 勝浩 沼畑 至宏 相坂 和幸	
1 車両の整備に関すること	主 査 中村 平	技能技師 山本 勝浩 沼畑 至宏 相坂 和幸

(4) 品種開発部

分 担 事 務	部 長 今 満	
	主 担	副 担
1 品種開発部に係る業務の総括に関すること 2 品種開発・種苗生産の渉外、指導及び研修等に関すること 3 農場管理委員会に関すること	部 長 今 満	副 部 長 (研究管理員) 前 嶋 敦 夫 研究管理員 東 秀 典
1 ナガイモ優良品種の開発に関すること 2 特産野菜原原種維持増殖事業(ナガイモ)に関すること 3 あおもりながいも産地改革推進事業の催芽等に関すること 4 「つくなが1号」・「あおもり短八」の種苗生産に関すること 5 畑作物原原種・原種の生産・供給のソバに関すること	副 部 長 (研究管理員) 前 嶋 敦 夫	部 長 今 満 研究管理員 東 秀 典
1 業務・加工用タマネギ品種及び栽培技術の開発に関すること 2 あおもりながいも産地改革推進事業の補光試験に関すること 3 水田を活用した野菜産地拡大事業に関すること 4 畑作物原原種・原種の生産・供給のソバ以外に関すること	研究管理員 東 秀 典	研究管理員 前 嶋 敦 夫 研究管理員 鹿 内 靖 浩
1 ニンニク優良品種開発に関すること 2 特産野菜原原種維持増殖事業(ニンニク)に関すること 3 たっこニンニクの種苗維持に関すること 4 暖地系および海外ニンニクの特性把握に関すること 5 ニンニク障害発生要因の解明試験に関すること	研究管理員 鹿 内 靖 浩	部 長 今 満 主任研究員 對 馬 由 記 子
1 ナガイモの遺伝資源の収集・保存に関すること 2 ナガイモの遺伝資源のウイルスフリー化に関すること 3 イチゴ優良品種の開発に関すること 4 寒冷地向けイチゴ品種の共同研究に関すること	主任研究員 對 馬 由 記 子	研究管理員 東 秀 典 研究管理員 鹿 内 靖 浩
1 試験研究の補助に関すること	非常勤労務員 砂 渡 美 佳	

(5) 病虫害部

部 長 新藤 潤一		
分 担 事 務	主 担	副 担
1 病虫害に係る業務の総括に関すること 2 病害虫防除の渉外、指導及び研修等に関すること 3 ドローンを活用した防除試験に関すること 4 ニンニクのチューリップサビダニの試験に関すること 5 だいこんのキスジノミハムシに対するフォース粒剤の効果試験に関すること 6 新農薬開発試験（殺虫剤）に関すること	部 長 新藤 潤一	副 部 長 （研究管理員） 近藤 亨 研 究 員 青山 理絵
1 農薬低減技術確立事業の試験に関すること 2 ドローンを活用した防除試験に関すること 3 新農薬開発試験（殺菌剤）に関すること 4 病害防除の指導及び研修等に関すること	副 部 長 （研究管理員） 近藤 亨	部 長 新藤 潤一 研究員 加賀 友紀子
1 トマト地下部病害虫体系防除（土壌還元消毒）に関すること 2 業務加工用に適したタマネギ栽培技術開発事業の病害虫防除に関すること 3 新農薬開発試験（殺菌剤）に関すること 4 病害防除の指導及び研修等に関すること	研究員 加賀 友紀子	部 長 新藤 潤一 副 部 長 （研究管理員） 近藤 亨
1 にんにくのイモグサレセンチュウの診断技術と防除試験に関すること 2 トマト地下部病害虫体系防除（抗線虫資材）に関すること 3 業務加工用に適したタマネギ栽培技術開発事業の病害虫防除に関すること 4 新農薬開発試験（殺線虫剤・殺虫剤）に関すること	研究員 青山 理絵	部 長 新藤 潤一 副 部 長 （研究管理員） 近藤 亨
1 試験研究の補助に関すること	非常勤労務員 中村 美幸 杉本 安希	

(6) ニンニク病害虫特別対策プロジェクトチーム

分 担 事 務	主 担	副 担
1 プロジェクトチームの総括に関すること	所長 西澤 登志樹	病虫部長 新藤 潤一 総括研究管理員 木村 勇司 (農林総研本務)
1 ニンニクイモグサレセンチュウ等虫害の防除技術に関する こと	病虫部長 新藤 潤一 総括研究管理員 木村 勇司 (農林総研本務)	研究員 青山 理絵 研究管理員 石岡 将樹 (農林総研本務)
1 ニンニク病害の防除技術に関すること	研究管理員 近藤 亨 研究研究員 岩間 俊太 (農林総研本務)	病虫部長 新藤 潤一 研究員 加賀友紀子
1 ニンニクの優良種苗の確保に関すること	研究管理員 前嶋 敦夫	研究管理員 鹿内 靖浩 研究管理監 近藤 亨

5 予算

(1) 全体予算 (決算額)

(単位：千円)

目・細目	平成30年度 決算額	左 の 財 源	
		県交付金	その他
職員人件費	140,173	140,173	
研究業務費（開発、支援研究、 チャレンジ研究）	5,303	5,303	
研究費交付金事業費	9,477	9,477	
受託研究費	11,025		11,025
受託事業費	674		674
補助金事業費	2,418		2,418
法人調整費	11,917	11,917	
管理運営費	39,334	39,334	
計	220,321	206,204	14,117

(2) 研究業務費（開発研究、支援研究、チャレンジ研究）

区分	整理番号	分類	研究課題名・事業名	期間(平成)		H30決算額(千円)		
				始	終	予算	収入	交付金
開発	野Ⅱ-1	イ(イ)①	青森ブランド野菜の高品質安定 生産・貯蔵技術の研究開発	26	30	981	0	981
開発	野Ⅱ-2	ア(イ)③	特産野菜優良品種の育成	26	30	1,052	0	1,052
開発	野Ⅱ-3	ウ(イ)②	気象変動や生物多様性に適応し た特産野菜の安全・安心な病害 虫管理技術の研究開発	26	30	1,696	0	1,696
開発			新たな土壌管理による高品質 農産物生産技術の開発	26	30	200		200
チャレ レンジ			青森県外・国外系統のにんに くを原料とした黒にんにく製造 研究	30	30	180		180
小計						4,109		4,109
支援	農Ⅱ-101		農作物の生育状況等に関する調査	26	30	61	0	61
支援	農Ⅱ-102		本県に適する優良品種の選定	26	30	283	0	283
支援	農Ⅱ-103		農作物の種苗等生産	26	30	705	0	705
支援	農Ⅱ-104		遺伝資源の維持・収集	26	30	145	0	145
小計						1,194		1,194
計						5,303		5,303

(3) 競争的資金研究

No.	研究課題名	実施期間	金額 (千円)	委託元
1	SIP（戦略的イノベーション創造プログラム）「次世代農林水産業創造技術」「持続可能な農業生産のための新たな総合的植物保護技術の開発	H26～30	2,864	国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構（中央農業総合研究センター）
2	業務加工用に適したタマネギ品種及び栽培技術の開発事業費	H26～30	1,336	国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構（野菜茶業研究所）
3	パイプハウスに導入できる低コスト省力化を実現する養液土耕・環境制御システムの開発	H29～31	2,300	国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構（生物系特定産業技術研究支援センター）
計			6,500	

(4) 受託研究・受託事業・補助金事業（国・自治体）

No.	研究課題名	実施期間	金額 (千円)	委託元
1	農薬安全国内検疫推進事業	H28～30	126	食の安全安心推進課
2	農薬低減技術確立事業	H28～30	851	食の安全安心推進課
3	あおもりながいも産地改革推進事業	H29～30	2,627	農産園芸課
4	ニンニクイモグサレセンチュウ撲滅対策事業	H30～31	5,009	農産園芸課
5	水田を活用した野菜産地拡大事業	H30～31	1,799	農産園芸課
6	普及指導員研修事業	H30	42	農林水産政策課
7	病害虫防除指針の原稿作成事業	H30	174	食の安全安心推進課
8	オリジナル品種「たっこにんにく」ウルスフリー株管理及びウイルス検定事業	H30	500	田子町
9	薬剤抵抗性病害虫・難防除雑草等の防除対策の高度化事業	H30	2,418	農林水産省
計			13,546	

(5) 受託研究（民間・団体等）

No.	研究課題名	実施期間	金額 (千円)	委託元
1	新農薬の実用化試験	H30	3,148	(公社)青森県植物防疫協会
2	フォース粒剤の生育期散布を活用した夏ダイコンにおける新たなキスジノミハムシ防除体系の検討事業	H30	400	シンジェンタジャパン株式会社アグリビジネス営業本部仙台支店
計			3,548	

(6) 青森県産業技術センター委員会

委員会名	委員名
成果「見える化」推進委員会	前嶋 敦夫
商品PR促進委員会	齋藤 生
情報セキュリティ委員会	鹿内 靖浩

VII 圃場利用図

